

---

# 神と魔王の人生ゲーム

零月零日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神と魔王の人生ゲーム

### 【NZコード】

N5742N

### 【作者名】

零月零日

### 【あらすじ】

神様が言いました。「人間滅ぼすか」 魔王が言いました。「させるかよ！」

神の命で人を殺す天使。魔王の命で人を助ける悪魔。それは人生ゲーム。人の生命を使つた、遊ぶ、弄ぶゲーム。人類の存続をかけた魔王と神様の戦いに、貧乏で金に困つた僕は、金目当てで参加する事になる。魂と引き換えに望みを叶える悪魔と契約し、今までの世界観は大きく変わる。

## プロローグ

これは神様が気まぐれに始めた人生ゲームだ。  
特に何かきっかけがあつた訳でもないだろう。ただ何となく、思  
い至りすぐにそれを開始したに過ぎないので。

これは人生ゲームだ。

プレイヤーは、たつたの一人？

神と魔王の出来レースにすぎないゲームだ。

これは人生ゲームだ。

何も生み出さない、ただただ失うだけのゲームだ。

これは人生ゲームだ。

人の生命を弄んだ、遊んだ、ゲームだ。

あなたの魂が所持金です。あなた自身が駒なのです。  
ナビゲーターには、神の使者、天使にしますか？  
それとも、魔王の使い魔、悪魔にしますか？

これはゲーム。

神の代理に天使。魔王の代理に悪魔。

駒の代わりに人。ボーダーの代わりに世界。

所持金の代わりに、生命。

「愛されているなんて思うなよ？ 愛されるような事をしているな

んて思つのよ、只の思い上<sup>じよう</sup>がりにしか過ぎないんだぜ

「わからないな、一体どうすればいいんだよ?」

「俺が知るかよ、考えろよ。お前はまだ生きてるんだから」

## プロローグ（後書き）

初めまして、もしくは「こんばんちば」。

感想などありましたらよろしくお願いします。

## 第一章 ～リアルにリンクのゲーム～

四月一日、エイプリルフール。嘘をついても許される日。  
だから、僕が巻き込まれたこの事件は、嘘だと思われてもしょうがないのだった。

説明するのは難しいし、説明する気などからつきしだ。  
だが、ただ一つ言えることは、  
僕の人生が狂ったのは、紛れも無くこの日だった。

四月一日、午後五時十分。嘘をついても誰かには許されない日。  
仕組まれたかのような時刻に、仕組まれたかのようなシチュエーション。本日はエイプリルフールではない。だから、嘘は許されない。

嘘が許されないからだろうか、それとも昨日の今日だからか、別の言い方も在つただろうに、それなのに僕はこう言つた。  
「僕はあと一年で死ぬんだよ」

四月一日、午後十時四分。嘘をついても誰かには許される日。  
仕組まれたかのような時刻に、仕組まれたであろうシチュエーション。本日はエイプリルフールだ。だから、嘘は許される。  
けれど、だからと言つて、真実が許されないわけが無いのだった。  
だから、

「お前はあと一年で死ぬよ」  
この発言が嘘だと言い切れなかつた。

四月一日、日曜日。

僕は一人夜道を出歩いていた。目的はなんてことない、ただの散歩。

というのは嘘。ただの散歩ではない。エイプリルフール、これくらいの嘘くらいは許してくれるだろう。

僕が出歩いているのは散歩なんて目的ではない。そもそも、散歩という目的はいささか説明不足な気もする。なんで散歩しているのか、その理由が必要になつてくるのではないのだろうか。気分転換、もしくは何らかの訳があつて言えないことをしに行く。そんな時にもしか散歩はしないだろう。

まあ、僕の散歩の理由は酷く現実的だった。ようするに、後者。一人家に残っている妹には、散歩に行つてくるから、と言い残して出てきた。本当はかなりやばいことをするために出たのだったが、妹は何も疑つてはいなかつた。それはそうだ。つい先日、僕は妹以外の唯一の家族を失つた。

僕らは両親を早くに亡くしていた。そして、その後は年金生活をしていた祖父のもとで暮らしていたのだった。その祖父がちょうど去年、僕が高校に入学してすぐ病に倒れて、そして先日、亡くなつた。享年九十六歳、病にかかるまでは自慢できるいい祖父だった。そしてつい先程まで、その葬儀やら通夜やら後始末をしていたのだった。それは目まぐるしく自体は動いていて、僕らは感傷に浸る暇など無いほどだった。それだから氣分転換だと勝手に認識したのだろう。普段の妹なら絶対に聞いてくることなのに、聞いてこなかつた。

僕としてはかなり嬉しい勘違いをしてくれたものだ。いや、もしかすると妹も一人になりたい時間がほしかったからかもしれない。

だけど、僕の本当の目的を妹が聞いたら、必ず止めるだろう。恐らく、足の骨やら肋骨の数本を折つてでも止めるだろう。場合によつては首の骨を折つてくるかもしない。そうなつたらどうしようもないな。

僕は街灯もない路地をぶらつく。俯き加減に、自分の影を見ながら街灯の無い辺りをうろうろと移動する。念のため言つておくと、僕は別に不審者ではないから。ストーカーとかする気は無いから。犯罪者はみんなそう言うつて？ そうじやない人はじやあなんて言えばいいんだよ。僕はストーカーですつて言つのか？ それこそ不審者だろ。

僕はあくまで、待ち人來たらずといった雰囲氣でうろついていた。そう、僕は待ち人がいる。いや、正確に言うと待つてているのは人といつていいのか怪しいのだが。

時刻は夜中の十時近く。多分、もうそろそろ來てもいい頃だと思う。いつも通りなら、必ずここに来る。

僕は準備として、つけていた腕時計を見る。別に左利きでもないのに右についている腕時計。別にどっちでも良かったのだが、自然なのは右だろうと僕は思つたからだ。

さて、僕の心の準備は整つている。妹と別れたときから決心はしていた。

家を出るときのモノローグがあるのなら、それはかなりいい感じに決まつていたと思う。

だから、あとは待つているのが來るだけだった。それで、僕の人生は大きく変化するだろう。

そして、運命の光が僕を照らした。

光が、僕を包み込む。目が眩んでしまう。思わず、ではなく意図的に右手で目を覆う。それは、僕にとつては欠かせない動作。

光がどんどんと広がつて、そして近づいてくる。もうすぐだ。

僕のほうからでは良く見えないが、それでも、待つていたものが来たのは明白だった。

とりあえず、場を占めるために一言言つておこう。

「てやんぐー！ 部長が一体何だつてんだ！ ひっく、あのハゲ散らかつたおっさんが高い氣なりやがつて！」

。

間違つた。これは別の人間の言つたことだつた。  
それでは氣を取り直してもう一度。

「?? さよなら」

ブレークの音は、聞こえなかつた。

ドカツ！

僕の体が、時速八十キロの鈍器で殴られたような衝撃を受けた。  
確実に、粉骨碎身だつた。

僕の体が宙に舞つた。

光が、僕から外れて、だんだん小さくなつていく。

そんな中、僕は口から赤い鉄の味のする液体を出して、微笑んで  
いた。

この期に及んで言つのもあれだが、体調は最悪、ただし、気分は  
上々だつた。

僕は声には出さず、念らしき物を遠くにいる妹へと送つてみた。

?? 生命保険が降りるだろ？ それで、僕の分まで生きろよ??

……疲れたな……、……眠い……。

おやすみなさい。

# 第一章 ～リアルにリンクのゲーム～

## 第一章 ～リアルにリンクのゲーム～

あれ？ 僕って、死んだよな？

そう思つ、そう思えることは、一体どうこいつ事なのだろう。死んだら考える事もできないとか、そんな風に思つていたのに。

「ええつと、死んでないからだな。助けてやつたぜ、青少年！」

…………、空耳が聞こえたのだろう。

僕は、死んだ。

飲酒運転の常習犯を見つけ、僕はなかば自分から轢かれた。最も、そんな証拠は残らなかつただろつが。賠償金と生命保険のために、僕は死ぬ事を決意したのだ。生きるために、仕方の無い事だった。僕の家は貧乏だった。

そもそも祖父の年金が唯一の収入だから、それは当然だつた。両親の貯金は高校までの養育費で消滅する。だから、祖父の持ち金で暮らしていたようなものだつた。その祖父が死んで、相続税とか言つので祖父の遺産は減る。さらに馬鹿みたいな葬式代。結局、残つたのはわずかばかりのお金だつた。それでは、僕か妹のどちらかしか生き残れない程度のお金。

だが、それも今日までだらう。

生命保険やら賠償金やらが妹の財産になつて、貧乏だった生活も一変。いつも言つてたよな、妹。

『兄ちゃんはさ、頭も悪いし運動も出来ないんだから、内蔵やら心臓を売つてお金をつくりてよ。頭脳明晰、才色兼備の私を灰被りのままで終わらせるつもりなの！？』

これでいいんだろう？

内蔵やら心臓は売れなかつたけど、お金は稼げたぞ？ 僕の内蔵や心臓も無駄にするつもりはなかつた。ちゃんとドナーカードに署

名をしておいたから。必要な人にはあげられたら良いんだけど、僕の死体でも臓器提供できるかどうかは知らないが。健康面なら問題なかつたと思うけど。

と。

「死んで喜ばれるぜ、みたいな展開の途中悪いんだけど、お前死んでないから」

そいつはペシペシと僕の頭を叩いた。

痛くも痒くもない。ただ、感触はある。というか、どう考えてみても固いコンクリートの感触が背中にある。

あ〜、え〜、まじか〜。

「……何？ 僕、死んでないの？」

「はい、俺が助けました」

なんてことしやがるぶん殴つてその内臓売り払つてやる、という意気込みと共に意外な程に自然に僕は起き上がれた。あれ、すごいぞ。これがつい先ほど轢かれた人間の体か？

しかしどうやら、轢かれたという事は本当らしく、僕の寝ていた場所には夥しい程の血が水溜まりを作っていた。

そして、僕を助けたというソイツは。

「生命保険？ 損害賠償？ 臓器提供？ 笑わせるなよ。俺が世界にもっと良い物を与えてやるよ。

最低最悪のゲームだがな」

悪魔だった。

## 第一章 ～リアルにリンクのゲーム～

### 第一章 ～リアルにリンクのゲーム～

世界を作った神様は、ちょうど思い出したかのように再び世界に目を向けて、こう思った。

「ちょっと人間に世界任せたのまずかったわ」

破壊される自然環境。自らの生活向上のために自然是失われていく。形成されていた自然循環機能はなくなり、いつしか消え行くばかりの悪循環になっていた。

神のためだと争う宗教戦争。最初に信じた物は同じだつただろう、しかし長い年月をかけてその崇拜物は変化し、もはや当初の信仰ではなくなっている。

自らの欲望のままに奪いあう世界が出来上がっていた。

そして、神様は思つた。

「人間滅ぼそう。こいつらが世界の主導権握つていたら、ろくな事にならない」

それはそう、今現在誰もが思つ事に繋がる。

「神様がいるのならば、どうして今の世界はここまで争いが多いんだろう？」

自業自得だつた。

神様は人間に世界を任せていた。その期待を裏切つたため、現在神によつて滅ぼされようとしている。

そんな神様に反対する者がいた。

「貴様のやり方は間違つている！　お前は人を何だと思つてゐるんだ！　貴様の思い通りにはさせん！」

そう言つたのが魔王だつた。

しかし魔王だ。

魔王の意見はこうだ。

『人間がいるから俺たち悪魔は魂を得られる。その人間がいなくなれば当然魂はなくなる。それに、悪魔は神と敵対する位置にいなければならぬ。それが悪魔の定義だから』

それにより、天使と悪魔は争う事になつた。

神の命のもと人間を狩る天使。

魔王の命のもと人間を助ける悪魔。

それは一見歪だが、それでも世界の均衡は保たれた。

かくして、神様と魔王、天使と悪魔の人間を巡ったゲームが起つた。

これは悪魔との契約だ。

お前の魂と引き換えに、俺はお前の望む物を与えよう。

力か？ 金か？ 名誉か？

お前が望めば、俺はその全てを与える。

これは悪魔との契約だ。

お前が得る物は多いだろう。

だが、失う物も多い。そして、契約せず失う物も多い。

お前が契約をしなければ、助かる命が助からない。

誰かが必ず不幸になろう。

お前が契約をすれば、助かる命が生まれるだろう。

誰かが必ず幸せになろう。

ただし、この契約は悪魔の契約だ。

悪魔の契約は、お前に一つの条件を与える。

一つは、『人助け』。

明確にどうしろと云ふことは言わない。

ただ、助けを求めている者がいれば、お前は助けなければならぬい。

もう一つは……。

「さあ少年、この悪魔の契約、結ぶか？ 跳るか？」

悪魔は悪魔らしい、あくまで薄笑いを続けていた。

解つてゐるんだろ、悪魔。

僕の過去を、お前は知つてゐるんだろ？

妹のために死ぬような奴にそんな契約を持ち出しておいて、知らないとは言わせない。

誰かが不幸になるつて、それはお前のことなんぢやないのか？

僕と契約できればお前は魂を得られるし、僕を轢いて罪に問われる飲酒運転野郎も罰せられない。一石二鳥じやないか。

まあ、僕も少なからず飲酒運転野郎には悪いと思っていたのだけだ。これに懲りて飲酒運転は止めるだろ。

まったく、自己犠牲も甚だしい。

だから。

「結ぼう、その契約。たとえこの魂が消え失せたとしても、僕はお前の誇れるパートナーになつてやるよ

一年後に死ぬ、この契約を受けよ。

## 第一章 ～リアルにリンクのゲーム～（後書き）

今更だけど、執筆途中のもう一つと似ていることに気付いた。  
どうしたものだらう。

# 第一章 ～リアルにリンクのゲーム4～

## 第一章 ～リアルにリンクのゲーム4～

四月一日、日曜日。

僕は悪魔と契約をした。そして、この日から僕の人生は変わった。

魂の残量を示す文字の無い銀時計、それが契約の証。

望みを叶えるべく、僕の影へと消えた悪魔。頭の中で会話が出来る、孤独じゃない、寂しくない、相手は悪魔だけど。

悪魔と契約したとは思わせないよう静かに帰宅。玄関を開け、ただいまを言う前に妹が言った。

「お兄ちゃん、お金無いんだから明日から十時以降消灯だよ」

僕が死んでいたら、一体妹はなんと言つただろう？

悪いな妹、僕が死んでたらこんなことにはならなかつた……かな？

「……ごめんな」

僕がこれから巻き込まれるゲームのことを考え、先に謝つておく。途端、キッと睨まれた。

「兄ちゃんは悪くないのに、なんで謝るのよ？ 私のために色々してくれてるじゃん。それに誇りを持って！」

「……ありがとな」

妹よ。なんだかすゞぐ、報われた。

「ほらほら、明日からはもう消灯時間なんだから、さっさと寝た寝た」

妹に押されるまま自室に入り、そのままベッドに倒れ込んだ。

疲れた、お休み。

……つて、おい悪魔、お前お金くれるんじゃなかつたのかよ？

「ギブアンドテイクな。お前が魂をくれれば、渡してやるよ」

……魂、ねえ。それつておいしいのか？ と、いうか、文字盤の無い時計つてことは、魂の量は目分量？

「当たり前だろ？ 魂の量なんて、測れる物じゃないんだから」

そうですね。

「で、どうする？ 魂を売るつてお金を得るか？」

……いや、遠慮しておこう。魂なんてそう簡単に売り渡していい物じゃない気がして来た。

それに、このゲームを続けるためには必要不可欠の物だろつ。こんなところで使うのはもつたいたい。

「ふうん、まあいいぜ。魂を持つ限り一年間は絶対に生きていられるからな。怪我をしたら俺が治すし、死んだら生き返らせる」

さらつととんでもない事言つてますよ、この悪魔。

なあ悪魔。さつきの話からすると、この神様と魔王の人生ゲーム、

最近始まつたつてことか？

「ううん、最近つて言えば最近。一ヶ月前からかな」

その一ヶ月、お前は一体何をしてたんだ？

「俺？ 別の奴と契約してたんだよ。……そいつとは契約途中破棄されたんだ」

契約つて、途中で破棄できるのか？

「できるさ。死ぬより恐ろしい代価があるけどな」

……なんか、僕はお前と会つた氣がするんだけど、氣のせいかな？

「さあね。今の俺の人格は、前の契約者に近いからな。お前とそいつが会つた事があるのかもしれないな」

ふうん。

ところで、『人助け』つて具体的には何をするんだ？

「さあて、知らねえ。お前が考える人助けをしろよ。俺は悪魔だぞ？」

それはもつともな話ですね。

「まあ、別に人を助けなかつたからと言つて、お前が死ぬ訳じゃないんだけどな。もつとも、果たしてそんなことが言えるかどうか…」

…

……僕は人を助けるぞ。人の痛みは、知つてゐるつもりだから。  
「重複。だから俺はお前と契約したんだ」

喰えない悪魔だ。

話は戻るけど、僕はこれまで生きていて、天使だの悪魔が人間の命を弄んでいるなんて気がつかなかつたけどさ。

「……明日になれば嫌でも気付くぞ。この世界、お前が思つてているより、かなりやばいぜ」

そんな不吉な言葉を最後に、僕は眠りに落ちた。

## 第一章 ～天使と悪魔と学園生活～

四月一日、月曜日。

僕の高校最後の一年、実際には人生最後の一年が始まった。だけど、ゲームは既に、始まっていたのだ。

僕が色々と考え事をしていた所為もあつただろう。だけど、一番の問題は、僕が気付かなかつた事にあるのではないだろうか。

曲がり角で食パンをくわえた少女とぶつかつた。

セーラー服姿で、鞄を片手。肩までの茶髪。そして、いわゆる美女少女だった。

距離にして三十センチの出会い、だつた。

……曲がり角で食パンをくわえた少女、ですか。

ベタ過ぎる展開、これもその一つなのではないだろうか。せめて食パンではなく、お茶碗なんて物を持っていれば一時代築けただろうが、生憎、食パンだった。この場合、トーストといつてもいいかもしない。生の食パンではないから。バターを塗つているのか、狐色の表面が光つっていた。

ドキドキ、心拍数バクバク、という展開。

しかし、これでは語弊があるので言い直す事にしよう。

曲がり角で食パンをくわえた『自転車に乗った』少女とぶつかつ

た。

じうになると状況の持つ意味が変わってくるぞ。

彼女は自転車に乗つていて、僕の三〇センチ手前、秒速十メートル。鞄片手の手放し運転。くわえたパンで声も出せない。

加害者と被害者の関係だつた。

ドキ……ドキ……ツー、心拍数低下、先生、患者の心拍停止です！  
という展開。

こんな状況でラブコメなんて口にできる奴は、よほど自分の生命力に自信がある奴だろう。ゴキブリ並みの生命力に、クマムシ並の耐久力。

こんなフラグは立てたくなかつたし、イベントだつてスルーしたかつた。

立つフラグは死亡フラグ。起こるイベントは、それから彼を見た人は誰もいなかつた、というゲームオーバーの時に出てくるエピローグ。

これって、死ぬんじゃない？

僕は何も思い起こすことも無く、というか暇もなく。

笑つた家族の表情が脳裏を通過することも無く、今まであつた幸せな出来事が走馬灯のように見えることも無いまま。

タイヤが肉にめり込む感触に戦きながら突き飛ばされた。

「いつっ！……？」

一瞬だけ宙を舞う僕。響き渡るブレー キ音。コンクリートに叩き

付けられ皮膚が破ける痛み。

だが、一瞬だけ見えたソレにより、僕の思考は止まった。

呼吸は止まらなかつた。

「『』、ごめんなさい！　だ、大丈夫ですか……？」

少女が自転車を降り、すぐに僕の元に駆け寄つてくる。傷が消えるように治つていくのを感じながら、この奇妙な感覚以上に、この奇妙な感覚が悪魔との契約のおかげとも気付かずに、その奇妙なソレに僕は震えた。

少女改め殺人未遂犯は、僕のクラスメイトだった。

その少女の影は、歪に忌まわしく呪われたような。氣色悪く触れたくもないくらい、人型を逸脱していた。

## 第一章 ↗天使と悪魔と学園生活←

殺人未遂。→重過失傷害未遂（悪魔の力で即時回復したため、実際にどれほどの怪我を負っていたのか僕は解らない）の少女改め、瀬川奈美は僕のクラスメイトだった。

第三者を貫き通している僕と違つて、ある意味クラスで有名な人物だ。

彼女は誰にも気兼ねなく話すし、結構可愛い。クラスでも話の中になる事が多い。人気もある。

しかし彼女は、人付き合いが悪かつた。

遊びに誘われても断る事しかない。それなのに彼女の周りには人が溢れている。

『ごめんね』と彼女はいつも言つ。それには、本当に謝罪の気持ちしか汲み取れない。

でもそれは、まるで、鳥籠の中の鳥が空を自由に舞う鳥を見ている、そんな印象を受けるモノだった。

最も、そんなことを思いながら彼女を見ている人など、僕だけだつただろうけど。

瀬川奈美に飛び立つ権利は無く、周りの人間は自由に飛び回っている。彼女はそれを受け止めている。  
どこか歪んでいる光景。

歪んだ生活を捩じ曲げ自然に見せる、そういう人間。

それが、僕が三年間で彼女に抱いた感想。

その彼女の影が、歪に形を変えていて、どうして驚かずいれよう？顔には出さないが。

「悪魔の眼には、人の心の形が見える」

心の形?

「影に人の心の形を覗る事が出来るんだよ。考へてもみろよ、どうやつて悪魔が悩める人間に悪魔の囁きをしていたと思うんだ? 悩める人間を見分ける眼がなけりや、そんなことできねえよ」  
「そうでもないような気がするんだけどな……。  
で、この場合、当然……。

「勿論、お前の人助け第一号さんだろ。クラスメイトなら知らない人よりもマシじやないか」

それはそうだけどさ。

だけど、何を悩んでいるか解らないどじうじょうもないだろ?

「そりやお前、自分でなんとかしろ」

……お前、それは職務放棄じやないのかよ?

「んや。悪魔』の俺には人の心なんてわからない、つて話さ」

……。

「俺には、どう頑張つても直面した死を回避させることしかできない。だけど、それじやあ人を救う事にはならない。」

だから、契約するのか。

「つまりだ。俺はお前のその魂が続く限り望む全てを『えるが、人助けの核はお前に担つてもらつ、ということだ」

なるほど……ね。

だけど、もし、僕がここで彼女を無視したら……お前はどうするんだ?

「もし? バカ言つなよ」

「お前はそんなこと、絶対しないだろ?」

喰えない悪魔だ。

僕と言う人間を知り尽くしているようじやないか。

ならば教えてくれ悪魔。

今、僕はどうすればいいんだ？

なんで彼女、服を脱いでいるんだ？

## 第一章 ～天使と悪魔と学園生活～

話は少し前、登校途中に戻る。

跳ね飛ばされた僕を、轢き殺しそうだつた瀬川が気遣う構図が出来上がつていた。

「本当、ごめんなさい！」  
「いや、いいつて。怪我も無いし……」  
「ほんとに怪我してない？」  
「本当に大丈夫。ほんと、僕は大丈夫」  
大丈夫じゃないのは、君の方なんじゃない？  
食パンくわえて自転車通学とか、一体どれほど急げばそうなるんだよ。

思考回路が大丈夫じゃない、と思っている僕は悪い子。まあ、悪魔と契約しているしな。

「よかつた……。でも、『ごめんね？』  
くどい。なにか裏でもあるのだろうか？  
それなら、こちらから手を打つてみよう。  
「いいくつて。それより、何か急ぐことでもあつたの？ 食パンくわえて登校なんて」

ひねりが無いよな。茶碗片手に登校すれば新時代でも築けるだろうけど。  
「えっと、ちょっと、ね……」  
その割に、自転車から降りて歩調を合わせて一緒にいるのはなぜだろう？

口調を濁らせるところを見ると、事情が有るようだ。  
それが彼女の影を歪めている原因、だろうか。  
困ったなあ、全然見当がつかない。  
とりあえず、天使とか出て来たら嫌だし、アレを聞いてみるか…

…。

「あなたは神を信じますか？」

「はいっ！？」

口をパクパクさせながら僕をまじまじ見る彼女。

まあそうなりますよね。何を言つていいんだこいつは、と。

「えつ、あの、ええっと……」

「冗談だよ。眞面目に捕えないでほしいな」

「あ、そななんだ。……変わったジョークだね」

僕もそう思う。

閑話休題。

話を進めよう。

僕が今の状況に陥った原因へと。

たわいもない話を適当にしながら、僕らは学校へと向かった。  
そして、いつもと変わらない校舎をみて彼女は『それじゃあ』と言つて僕から離れた。

そして僕も生徒玄関へと向かう、はずだった。  
だが、僕にはそれができなかつた。

影が  
学校の存在が  
不幸の固まりだつた。

知らずのうちに脚が崩れ、地面に片膝をついていた。

悪魔……お前が言つていた意味……やつとわかつた。

そこから僕が気を失い、保健室で起きるまで話は飛ぶ。

僕の目の前に、彼女、瀬川奈美は居た。

僕は保健室のベッドの上で寝ていた。若干頭がふらつくが、それ

は精神的ダメージの所為だらけ。  
それなのに。

「ごめんな、やっぱり大丈夫じゃなかつたんでしょう？」  
彼女は俯き頭を下げる。

ちがう違う、間違つてゐる、誤解してゐる！

「……ねえ、人見君」

「…………なんですか？」

ここになつてやつと僕の名前が出た事は気にする事ではない。  
少女が制服のボタンを外した。

そして。

「体で、お詫びをするわ」

ハラリ、と彼女の制服が保険室の床に落ちた。

というわけなのだ。

どういう意味なのか僕にもさつぱり解らないけどね。  
ただ一つ言える事は。

このゲーム、展開が急展開しか無い。

## 第一章 ～天使と悪魔と学園生活～4

瀬川奈美、クラスで人気の可愛い少女。

その少女が、制服を脱いで下着姿で僕の前に居た。

彼女の体は、予想とは裏腹に、まあお腹を見ていたんだけど、筋肉が引き締まつていて……。

幻想が殺された。

なんていうか、なんでこいつの体はこんなにも美しいんだろう？  
その引き締まつたお腹とか見蕩れてしまいそうだけど、なんか自慢されているようで嫌だ。

僕は運動系じゃないから、腹筋なんて割れていないんだよ。  
視線をその肢体から逸らし、床に落ちていた制服を拾い彼女に押し付ける。

「……服を着てください」

「あれ？ 私って、そんなに魅力無いかな？」

小首を傾げ、唇に人差し指を当てて上目遣い。

ありますよ！ ありますけど、それとこれとは話が別なんですよ！

「僕は……臆病なんだよ。それに、僕が倒れたのは事故のせいじゃないから」

「…………」

数秒間、彼女は黙り、そして黙つて制服を受け取った。

僕は後ろを向くが、背後で聞こえる衣擦れの音が耳にこびりつく。

「…………、気まずい。

しばらくの静寂の後、瀬川がベッドに腰掛け、ギシッと軋む音がした。

そして、囁くよつに瀬川が話を切り出した。

「ねえ、月影君」

「…………何？」

瀬川は僕の目を覗き込む。

「あなたは私のこと、どれくらい知っている?」

「人気のクラスメイト、話の中心にいる少女……自由に飛べない鳥」  
そう、と瀬川は続けた。

「自由に飛べない鳥……か。やっぱり、あなたはすごいね。当たつてるよ」

「そりやどうも」

瀬川は笑つて、僕は笑わなかつた。

「ねえ、月影君。……私ね、結構あなたのことを見ていたの。知つてた?」

「……いや」

瀬川が僕に近づいた。

ギシツとベッドが軋み、瀬川の髪から花のような香りがする。

「あなたはいつも、誰かの利益を考えて行動している。誰もやりたがらない仕事を引き受けたり、誰もが気付かないような小さな仕事を影でやつている」

「そりや違うな。僕はそんな出来た人間じゃない」

「謙遜ね。……ねえ、頼みを聞いてもらつて良い?」

これは、願つても無い状況だ。

彼女の心の闇を、僕は垣間見ようとしている。

この流れ、僕の多少のプライバシーに関わったとしても、止めるわけにはいかない。

「……なに?」

瀬川は驚いたように僕を見る。

予想外の反応が返つて来たような表情だ。

「……気付いている? 私とあなたつて、今日初めてこんなに話したのよ? それなのに、良いの?」

「クラスメイトだろ? 聞かれて困ることもないしな

ふふつと、瀬川が笑つた。

けれど、楽しそうでは無い。辛そうに、笑つてゐる。

そして、少女は僕にソレを打ち明けた。

「『めんね？ 变な話だつたよね。あなたにする話じや、なかつた』  
『…………』

「でも、誰かに聞いてほしかつた。……ありがとう」  
瀬川は立ち上がり、そして保健室を出て行つた。  
繫がり解け結ばれる。

服を脱いだのにも、食パンをくわえていたのも、ちゃんと意味は  
あつた。

鍵は揃つた。

後は、扉を開ける『力』がいる。

瀬川は僕にそんな『力』があるとは思つていなかつたようだけど  
……いや、藁にも縋る想いだつたのかな？  
クラスで有名なパシリ……もとい人のいい奴の僕に打ち明けたの  
は、そういう意味だろう。

『助けてほしかつた』、とか言ひそつて嫌な展開だ。  
やれやれ。

僕は呟いた。

「……ゲーム始めようか悪魔。あくまで悪魔的に、悪逆非道に」

僕の笑みは、悪魔の微笑にしかならなかつた。

放課後。

全てに別れを告げ、少女は屋上にいた。

そして、出会つた。

それは天使なのか、悪魔なのかわからない。

ただ一つ言える事は。

それは天使のようだった………という事だろ？。

## 第一章 ～天使と悪魔と学園生活4～（後書き）

次回、やつとしさ本編的内容に入りたいと思います。

## 第二章 ～天使と悪魔と学園生活5～

月が無い夜だった。

少女は屋上に立ち、その時を待つた。

契約により、今日、彼女は全てを奪われる。

「あ～、いたいた。意外意外、てつきり今朝みたいに逃げていると思つたんだけどね」

そう言つて、一人の男が屋上に現れた。

男は黒のスーツに眼鏡、細めながらしつかりとした肉付きの体。

「契約では今日まで、だつたはずよ？ 放課後までまつてくれてもいいでしょ？」

「そんなにこの学校に未練があつたのかい？ そんな訳ないよね。君にとつて学校は、より良い就職のために履歴書に書く程度の意味しかなかつたはず」

「私の事を知つたような事言わないでほしんだけど」

男はそれを軽く無視し、少女に近づく。

「いや、でも本当によくここに残つていたね。逃げ出さないなんて偉いねえ」

「私が逃げれば、弟の方へ行くんでしょ？ ……私は、あの人達とは違う」

少女は睨むように男を見る。

怖い怖い、と男は茶化すように笑い肩を竦める。

「あの人達、つて君の両親だろう？ 酷い娘だね、君」

「子供を売り払う親の方が、酷いと思いますけど」

少女が冷たく言い放つのを、男は小さな微笑で返した。

「君は本当にいい子だ。そのまま大人しくしていると良い。買い主には満足いただけるかどうか怪しいがね」

「……一つ聞いていいですか？」

男の下卑た笑みを見ないように少女は言った。

「人身売買なんて、正気ですか？」

途端、男の笑みが花を咲かせたように広がった。

「当たり前だよ！ 今この世界で、これほど儲かる仕事もない！」  
怪訝そうな目で自分を睨む少女を気にせず、男は熱く語りだした。  
「人身売買には色々あるんだ。例えば、快樂主義者に玩具を売るとか、人の集まらない極寒での仕事の奴隸として売るとか。ああ、警察に捕まてない犯罪者を遺族とかに売る、って言うものもある。意外と売れ筋なんだよね、仇討ち制度がなくなっちゃったけど、憎しみはなくならないからね」

「……最低」

「最低で結構」

男は眼鏡の位置を直し、少女の体を舐めるように視線を移動させる。

「君はいい体をしているからねえ、相場の十倍近い値段で売れたよ。バイト、力仕事もしていたんだろう？ 締まりのいい体が、金持ち連中は好きみたいでねえ」

少女は男の視線から逃れるように夜の街へと視線を逸らす。

街はいつも通り。自分が人生を売ろうとしていても、何一つ変わりはない。

「怖いよね、人間の『欲』って。自分の『欲』を満たすためなら、他人がどうなろうと知つたこつちや無いんだからさ。おかげで私は随分と儲けさせてもらつた。……本当、あれは神様の導きみたいだ」  
最後の方は咳きで、ただの独り言のようだった。

「さて、そろそろ君の買い主が現れる時間だ。いや、飼い主かな？ どうすればいいか、わかっているよね？」

悪意のある笑みを浮かべた男に、少女は答えた。

「……わかっているわ。抵抗せず、何でも言う事を聞けば良いんで

「ううう？ ううじやなきや……」

「そりだねえ、弟くん、まだ小学生だよね？ ショタ！」とて知つてるよね？」

ぞつと寒気がしたが、それを悟られなによつに少女は言つ。

「本当に、弟には手を出さないんでしょうね？」

「勿論。君を売つた時点で十分儲けさせでもらつたからね」

そう言つて男は執事のように恭しく頭を下げる。

「約束を守らなければ、顧客は得られないんだよ」

そして。

ギィー、と。

扉が開き、一人の男が現れた。

その男は黒のマントに身を包み、ヘルメットで顔を隠していた。

男は時間を確認し、男に笑みを浮かべる。

「時間ぴったり、それではまず先に現金の方を。その場で見せて下さい」

ヘルメットの男はそのマントの下からアタッシュケースを取り出し、開けてみせた。

そこには、諭吉を百枚で束ねたものが百程あつた。

「いいですね……。では、交換といきましょう」

男は少女を引っ張り、そしてヘルメットの男の前に連れ出した。

少女に手錠をかけ、まずその鍵をヘルメットの男に渡す。

「商談成立。返品は不可ですが、いいでしうか？」

「…………」

ヘルメットの男は無言で頷き、そしてアタッシュケースを男に渡す。

「では、コレはあなた様の持ち物になりました。愛でるなり、壊すなり、お好きなように」

男はそのアタッシュケースを肩に担ぎ、そして夜の校舎の中へと

消えた。

夜の学校の屋上に、一人の人間がいた。

一人は……人間ではなかつた。

ヘルメットの男が尋ねた。

「……名は？」

少女は、答えた。

「……奈美、です。……………ご主人様」

## 第一章 ～天使と悪魔と学園生活～

瀬川奈美は借金を抱えていた。

それは彼女の両親が作ったものだつたが、その両親は数年前に行方を晦ませている。彼女に一千万もの借金を押し付けて。

瀬川の両親は、借金取りに彼女を売ったのだ。

信じられず、許せなかつた。

けれど、不思議と問いつめようとは思わなかつた。

そんな理不尽なもの無視しても良かつただろう。逃げても良かつたはずだ。

だが、彼女はそれができなかつた。

彼女には、弟が居た。

まだ小学生の弟。両親が借金を押し付けて逃げた事も知らない、世界の汚さを知らない子供。

自分で逃げるのならば、彼女にだつて生き残る術はあつた。だが、年端も無い弟を連れて借金取りから逃げる術は無かつた。

自分が逃げれば弟が代わりに売られる。

彼女にはそれは許せなかつた。

それでは、両親と同じじやないか、と。  
だから、彼女は自分を売る事にした。

瀬川奈美は、自分よりも弟を優先した。

「それが愛じやなくて、一体なんだといふんだか。面白いな。実に面白い」

男はヘルメットに手を翳し、そして横にスライドさせた。ヘルメットはその手が糸を解いていくように、その手の動きに合わせて黒の粒子となつて夜の闇に消えて行く。

そして、

「救いに来たよ、瀬川奈美。お前はこんなところで人生を棒に振るべき人間じゃない」

悪魔がニヤリと笑みを浮かべていた。

時刻はまだ正午。

場所は自宅。邪魔は入れさせない。

「命令だ、悪魔。魂と引き換えに、望むモノをよこせ」  
瞬間、ポケットに入っていた銀時計が熱くなるのを感じた。僕は銀時計を取り出し、その蓋を開いた。

「我、契約文に従い汝に望むモノを与えるよう」

そう悪魔の声が脳裏に響き、手元の銀時計の針が幾分、それこそ数分程度だけ進んだ。

目の前に塵が集まつてくる。それが煌めきながら形を作つて行き、そして。

「……悪魔。さすがは、悪魔だ」  
「やっぱり、人間が望むものはコレだよな？」  
そこには、重さにして三キロ相当の金ができていた。  
さて。

「一体これをどうやって現金にしたものかね……」

「ふふふふ、たんまりお金も入ったし、そろそろ別の県に行くかな?  
この世界はいい感じに歪んでいるからね。欲望の形に  
借錢取りの男は薄ら笑いを浮かべながら、学校から出よつとして  
いた。

「恨み辛み、復讐報復、性欲情欲、殺意惡意、使い捨ての労力……  
人の使い方なんていぐらでもある」

「それが天使のやり方、か?」

と、不意に男は声を掛けられた。

「おや? 誰だい君?」  
声をかけたのは、

「どうも、悪魔です。お前を消しに来たぞ。大天使『ラファエル』  
悪魔だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5742n/>

神と魔王の人生ゲーム

2010年10月8日12時13分発行